

放射能にさらされる子どもたちは。 福島で、いま何が起きているか。

いま、福島では何が起きているのだろう。

藤沢市にも、震災後3ヶ月で19人の子どもたちが福島県から転入してきた。その中には津波被害を受けた地域ではなく、福島市などの内陸部から避難してきた子どもたちも少なくない。

この子どもたちは、なぜ藤沢にやってくるようになったのだろう。

福島第一原発の事故で放出された放射性物質は、同心円状に拡散したわけではない。

群馬大学の早川由紀夫教授の作成した放射性物質の拡散図からは、風の流れや地形によって原発から離れていても大量の放射性物質が降り注いだ地域があることがわかる。



▲放射性物質の拡散図

福島市は原発からは50キロ以上離れている。だが6月29日に文部科学省が行った調査でも、土壌から640ベクレル/m²のセシウムが検出された“ホットスポット”がみついている。これは局地的とはいえ、チェルノブイリ事故の際の避難義務区域の線量に相当する。

福島第一原発事故はいまだ収束したわけではない。原発からは、減少したとはいえ今も放射性物質が大気や海水に放出され続けている。

福島県の人々は、今も放射能の危険にさらされているのだ。

マスク姿の子どもたち

東北新幹線を福島駅で降り立つと、駅前の風景には特に大震災の影響を思わせるものは見あたらない。

だが、どこか違った光景がある。それは、道行く人々、特に子どもたちにマスク姿が少なくないことだ。

私が訪れた日の福島の最高気温は29度。湿度が高く、歩くだけですぐに汗が流れてくる。

だが、福島駅に近い小学校の窓は閉められたままだ。子どもたちは蒸風呂のような教室で授業を受けていた。

福島県が4月5日から7日にかけて行った空間線量

調査では、調査対象の小・中学校などの75.9%が、法令で定める「放射線管理区域」基準を超えていた。

校庭に降り積もった放射性物質は、風によって舞い上がる。また、背の小さい子どもたちは大人よりも放射能の影響を地面から受けやすい。

危険なのは校庭だけではない。側溝や雨樋などには放射能を帯びた塵が集まる。集積・濃縮されることで、こうした場所の放射線量はさらに高くなる。

マスクや閉め切った校舎での授業は、子どもたちを放射能から守るための対策なのだ。

私が福島を訪ねたのは、「放射線による健康被害から子どもたちを守る声明」を出し自治体や教育委員会と放射能対策を協議している福島県教職員組合書記長の角田政志さんにお話をうかがうためだ。

線量計が振り切れた！

竹村 福島第一原発の事故の後、福島の学校はどんな状況だったのでしょうか。

角田 私たちも最初、放射能についての知識はほとんどありませんでした。

でも3月15日以降、福島市でも異常に高い放射線量が観測されました。学校にあった簡易線量計は10マイクロシーベルトまでしか計れないんですが、その針が振り切れました。それで「これは大変だ」ということになったんです。

でも原発事故への対応マニュアルは、教育委員会も誰も持っていませんでした。「放射能の怖さ」の教育ではなく、「原発は安全」の教育だけが行われてきていて、事故への対策は何もなかったんです。

竹村 実は藤沢だって、原子力空母ジョージワシントンが停泊する横須賀基地から20キロなのですが、原子炉事故に備えた対策などは今もありません。

角田 それで私たちは、まず放射線量をきちんと計測して、公表すべきだと申し入れたんです。

でも、なかなか行政は動きません。安全基準もないし、「数値の一人歩き」が心配だというのです。

竹村 どこの自治体の反応も最初はそうでした。

角田 たしかに放射線量の測定というのは難しいんで

す。どの場所で、どの高さで計るか、個別なのか平均値なのか、そもそも、精度の高い測定器だってない。学校の安全基準もない。

ひと月以上経ってやっと文科省が「安全基準」を出してきたと思ったら、出てきたのが例の「20ミリシーベルト/年」という数値だったんです。

竹村 文科省が4月19日に出した、「非常事態収束後の参考レベルの1～20ミリシーベルト/年を学校等の校舎・校庭等の利用判断における暫定的な目安」とする、という通知ですね。

角田 20ミリシーベルトなんて、とんでもない。これを越えたら緊急避難しなければならないという数値ですよ。こんなものを放射能の影響を受けやすい子どもたちの基準にするわけにはいかない。

私たちが校長会も撤回を求めました。保護者の有志も汚染された校庭の土を持って文科省に乗り込んで、「冗談じゃない」という抗議になったわけです。

竹村 それでようやく文科省も「1ミリシーベルト以下をめざす」と基準を訂正したわけですね。

角田 でも、それで終わるわけではありません。学校の線量をともかく下げなければならない。

政府の対策は後手後手でした。これ以上待ってられない、ということで郡山市がまず独自に校庭の汚染土壌の入れ替えを始めます。



▲除去された校庭土壌

竹村 自分たちで判断するしかなくなっていった

角田 汚染されているのは、学校だけではありません。私の家だって、1階で計ったら0.4マイクロシーベルトくらいありました。通学路をはじめ町中が汚染されているのだから、学校だけ除染してもどうしようもない。いま、休日になるとどこも町内会ぐるみで家や道路の除染をしています。

竹村 汚染の度合いは、場所によって違うのですか。

角田 通学路の途中にも、線量の高い草むらや側溝があります。ともかく細かく調査をして、汚染の高い“ホットスポット”を探して、除染する。

それまでは汚染度の高いところには、子どもたちを近づけないようにしなければいけません。

この汚染の「線量マップ」をようやく作り始めたところです。ともかく、放射性物質を徹底的に無くすか、危険な場所から移動するか、どちらかです。

一万人の子どもが県外避難

竹村 「危険な場所から移動」と言えば、神奈川にも福島から避難してきた方がおおぜいいます。

角田 実は、いったい何人が福島から出て行ったのか、誰もわからないんですよ。住民票を残したまま避難

しているケースも多い。避難先の教育委員会から連絡があっただけでも、8900名が県外に避難していることがわかっています。乳幼児や就学前の子どもを入れれば、1万人を越えるともいわれています。

竹村 1万人も！

角田 経済的な理由で、逃げたくても逃げられない子どももっているわけです。父親だけ残って、週末だけ避難先に会いに行っている家庭もあります。

竹村 関東にいと、どうしても「過剰反応」という見方も出てくるのですが

角田 たしかに、学者によっていろいろな意見があります。中には「100ミリシーベルト/年まで大丈夫」という人までいます。

でも、親だったら子どもの「万が一」を心配するのが当然です。「過剰反応」というけれど、妊婦だったら、赤ちゃんのことを考えて避難しますよ。

逆に、避難することもできず、不安を抱えながら授業を続けている妊娠中の先生もいるんです。

竹村 先日、子どもたちの尿からセシウムが検出されたという報道がありました。少量とはいえ内部被曝をしている可能性があるということなのでしょうが

角田 実は、今だにちゃんとした疫学的な調査は行われていないんです。特に原発事故の時に周辺にいた子どもたちが心配です。

福島県では今後、全県民を対象に健康診断を30年以上続けることになりました。これは県外に避難している子どもたちも対象になります。



竹村 給食については、どんな議論になっていますか。

角田 これは難しいです。私たちがまだ方針が出ていません。農家のみなさんのことを考えると極端な規制はしたくない。でも、「安全」を考えると正直なところ葛藤があります。

竹村 神奈川の私たちは、結局は福島のみなさんに原発を「押しつけて」暮らしてきたわけです。

だとすれば、いま福島の子子どもたちが直面している放射能汚染の問題も、「福島だけの問題」にはならないはずですよ。

まず福島の子子どもたちの現実を知り、その上で何ができるのか、私たちが考えていきたいと思えます。

福島の情報、断片的には神奈川にも伝わってくる。だが、私たちはどこまで福島の状態を「私たちが問われている」問題として受け止めてきたらう。

原発は、ひとたび事故を起こせばこれだけの被害をもたらす。福島をの教訓を生かす道があるとすれば、それは原発に依存しない社会をめざすこと以外にない。